

5月24日（日）サムエル記第二12章1～6節

「その男はあわれみの心もなく、そんなことをしたのだから、その雌の子羊を四倍にして償わなければならない。」（6節）

ナタンは、富める人と貧しい人という二人の人を通して たとえて語ります。富んでいる人には、とても多くの羊と牛の群れがいましたが、貧しい人は自分で買ってきて育てた一匹の小さな雌の子羊のほかは何も持っておらず、その子羊を可愛がり、大切にしていました。一人の訪問者が、富んでいる人のところに来ました。自分のところに来た訪問者に対して通常であれば、自分の所有の家畜を屠ってもてなしますが、この金持ちは自分の群れから取るのを惜しんで、その代わりに、貧しい人の雌の子羊を奪い取り、自分のところに来た人のために調理しました。ここでの「奪い取り」との表現が、非常に暴力的な意味合いを思わせ、ダビデがウリヤに対してしたことを連想させます。ダビデは王として義憤に燃え、「そんな男は死に値する」と死をもって報いることを宣言します。そして「あわれみの心もなく、そんなことをしたのだから、その雌の子羊を四倍にして償わなければならない。」と言います。ダビデも、あわれみの心もなく、ウリヤが戦死するように仕向け、しかもウリヤは亡くなったので、もはや彼のために償うことすらかなわなくなっていました。

ナタンの話をダビデは第三者として聞き、それは彼にとっては他人事だったのでしょうか。もしこれが自分に対して語られていると知ったらどうだったでしょうか。私たちも説教を聞き、聖書を読む時に、他人事のようにして聞いたり、読んだりすることはないでしょうか。時々礼拝説教が終わった後で話をしていると、自分の娘に聞かせてやりたかったとか、私の母に向けられた説教だったなどと言われる方々があります。みことばは他人ではなく、まず自分に向けられたものであることをおぼえましょう。そして謙遜にみことばに聞き従う信仰が与えられたいものです。

※ 原稿に抜けがあったため、サムエル記第二12章7～12節は来週分に掲載されます。

5月25日（月）サムエル記第二12章13，14節

「主も、あなたの罪を取り去ってくださった。あなたは死なない。」（13節）

ダビデは「私は主の前に罪ある者です。」と、謙遜に自分の罪を認めて悔い改めました。それに対してナタンも「主も、あなたの罪を取り去ってくださった。あなたは死なない。」と、主のあわれみによる罪の赦しを宣言しました。福音の中心は、あなたは決して罪を犯すべからずではなく、罪を認めたなら謙遜に悔い改めよ。主はあわれみをもって赦してくださるということです。詩篇51篇は、まさにその時のことを歌った詩篇です。17節に「神へのいけにえは 砕かれた霊。打たれ 砕かれた心。神よ あなたはそれを蔑まれません。」とありますが、まさに

神によって罪を犯したダビデは霊と心がボロボロになるほどに砕かれたのでしょうか。その中で彼は謙遜に自分の罪を認めて悔い改めた時に、主は赦してくださいました。特に、「あなたの罪を取り去ってくださった」（13節）と言うほどに完全に赦してくださったのです。そして「あなたは死なない。」とダビデの命をも救ってくださいました。しかし、その一方で「あなたに生まれる息子は必ず死ぬ」と言われました。そのようなかたちで彼は罪の結果を刈り取ることであり、自分の犯した罪の重大さを味わい知ることとなります。

私たちも罪を示されたなら、サウルのように心を頑なにせず、むしろダビデのように謙遜に主の御前に罪ある者ですと、罪を悔い改める者でありたいと思わされます。今示されている罪はないでしょうか、主の御前に悔い改めましょう。

5月26日（火）サムエル記第二12章15～23節

「しかし今、あの子は死んでしまった。私はなぜ、断食をしなければならないのか。あの子をもう一度、呼び戻せるだろうか。私があの子のところに行くことはあっても、あの子は私のところに戻っては来ない。」（23節）

14節で「あなたに生まれる息子は必ず死ぬ」と言われたそのことばどおりに、15節で主は、バテ・シェバがダビデに産んだ子を打たれたので、その子は病気になりました。ダビデはその子の癒しのために、断食をして引きこもり、一晩中地にひれ伏して神に願い求めました。17節で家の長老たちがダビデを起こそうとしても起きようとせず、一緒に食事を取ろうともしないで願い求める姿に、ダビデが必死になって神に願い求めたことが分かります。しかし願いもむなしく「七日目にその子は死にました」（18節）主は、はっきりと分かるかたちでダビデの願いを拒まれました。そして、これがダビデに対する主のみこころだったのです。

わが子の死を知らされたダビデは、「地から起き上がり、からだを洗って身に油を塗り、衣を替えて主の家に入り、礼拝をしました。そして、自分の家に帰り、食事の用意をさせて食事をしました。「あなたのなさったこのことは、いったいどういうことですか。」と家来たちは驚きをもって尋ねます。すなわち、普通に考えれば、人が亡くなった時に、悲しみのあまり起き上がれないほどに地に伏し、食事も取れないと思えますが、ダビデはそうではなかったからです。ダビデは、息子が生きていた時には、もしかすると主がこの子をあわれんで生きるかもしれないという希望をもって祈っていたのですが、主がその子の命をとられた今となつては、主のみこころと主権にすべてをゆだねるしかないとダビデは思ったのです。

私たちも熱心に祈る中で、主が明確にノーをつきつけられることがあります。その時に私たちは主の御名をたたえながら、すべてを主の御手にゆだねていますか。これは決してあきらめとか自暴自棄になるということではありません。主の主権にゆだねて祈る信仰があるかどうかです。それと同時に、ダビデの息子が打たれて病気になり、七日目に亡くなった姿は、自分の罪をその身に負い、十字架につけられ、苦しみ、血を流し、命を捨てられたイエス様の姿に重なり

ました。イエス様の命も決して助けられることなく、私たちの罪のさばきのゆえに打たれたのです。ダビデは、生まれて七日目で亡くなった息子の姿に自分の罪の大きさを常に感じたことでしょう。それと同時に、イエス様の十字架を仰ぐときに、私たちも自分の罪の深さに涙し、ひれ伏させざるを得ないのです。

5月27日（水）サムエル記第二12章24, 25節

「主は彼を愛されたので、預言者ナタンを遣わし、主のために、その名をエディデヤと名づけさせた。」

バテ・シェバは、夫ウリヤが戦死し、生まれてきた子が七日目に亡くなるという二重の悲しみを味わいました。どれほど大きな悲しみの中に置かれたのか想像すらできません。わが子が死んだことについてはダビデは、自分の罪のゆえであることを自覚的に知っていました。主の御前における罪の悔い改めと同時に、悲しみの中にあるバテ・シェバを慰めることもダビデにとってなすべき重要なことでした。

その後、再びバテ・シェバは身ごもり、男の子を生みます。その子をソロモンと名づけました。ソロモンという名は、「平和」「繁栄」を意味するヘブル語のシャロームから派生したもので、まさに彼の将来に対する希望を抱かせる名であったと言えます。もちろん、生まれた子には未来や希望があり、両親は、子の成長と希望に満ちた将来を心から願うでしょう。しかし、生まれた子たちは、国家の状況や時代の風によってさまざまに将来が大きく揺さぶられてしまいます。そう考えた時に、親だけではなく、子どもたちも主を信じる信仰へと導かれ、神にある平和と繁栄を自分のものとするように、教会に与えられた子どもたちのために私も熱心に祈ってまいりたいと思わされます。

「主は彼を愛されたので」とあります。主が、ダビデとバテ・シェバの間に祝福の証しとして子を与え、その子を愛されたということは、主がダビデの罪を完全に赦され、再び主との関係を回復されたことを意味しています。もし私たちが心から自分の罪を悔い改めて、主の赦しを願うなら、主はそれに愛をもって答えてくださり、私たちを正しい関係に再び入れてくださり、豊かな交わりを回復してくださるのです。私たちもダビデのように罪を示されたなら、心からその罪を悔い改め、主の赦しを願う者でありたいと思わされます。

5月28日（木）サムエル記第二12章26～31節

「ダビデはすべての兵を集めてラバに進んで行き、これと戦って攻め取った。」（29節）

11章1節に「彼らはアンモン人と戦い、ラバを包囲した。」とありますが、いよいよここに「この王の町を攻め取った」とあります。27節で、ヨアブは使者を遣わして、「私はラバと戦って、水の町を攻め取りました。」と言わせます。水の町とは、恐らく水源を確保するために要

塞で防備した町のことだと思われますが、水源を断たれては勝ち目がありませんからアンモン人も降伏せざるを得なかったということなのでしょう。ヨアブは、28節で「この町に対して陣を敷き、あなたがこれを攻め取ってください。私がこの町を攻め取り、この町に私の名がつけられるといけませんから。」と使者に言わせます。ヨアブは、謙遜な人物だったのでしょうか。忠誠心から、町を征服した栄誉をダビデに帰したいと思ったのです。私たちが主のために何かをなした時に、自分の名が残ることや自分がたたえられることを望んではいけないでしょうか。すべての栄光を主に帰する者でありたいと願います。なぜなら、すべてのことは主の恵みによってなされたことを私たちは知っているからです。

ダビデはラバを攻め取りました。30節で王の冠をその頭から奪い取り、その冠をダビデの頭に置かれたというのは、統治者が変わったことを意味しています。そして、その町から非常に多くの分捕り物を持ち去り、その町にいた人々を捕虜として連れ出し、労働に従事させました。そして、最後に「ダビデとすべての兵はエルサレムに帰った」と締めくくられています。ここでのアンモン人との戦いにおける勝利を通して、主はダビデの罪を赦すことで、ダビデとの関係を回復し、ダビデに再び豊かな祝福を注ごうとしておられることを示しています。罪の赦しを通して主は私たちとの関係を回復されますが、それは豊かに恵みと祝福を注いでくださる関係への回復を意味しているのです。

5月29日（金）ササムエル記第二13章1～7節

「床に伏せて、病気のふりをなさってください。父君が見舞いに来られたら、こう言うのです。

『どうか、妹のタマルをよこして、私に食事をとらせるようにしてください。彼女が私の目の前で食事を作って、私はそれを見守り、彼女の手から食べたいのです。』（5節）

1節には3人の人物が出てまいります。アブサロムは、ダビデの三男で、ゲシュルの王タルマイの娘マアカの子でした。（3章3節）そしてタマルは、そのアブサロムの妹でした。アムノンは、ダビデの長子で、イズレエル人アヒノアムの子でした。（3章2節）アムノンは、容貌が美しかったからでしょうか、異母妹であったタマルに恋をしました。しかし2節には「彼女が処女であって、アムノンには、彼女に何かをするということとはとてもできないと思われたからである」とありますが、これは、どのような意味かと申しますと、この当時王女らの活動空間は極端に制限されていて、部外者との接触は厳しく制限されていたようです。ですから、どうすることもできないアムノンは、妹タマルのゆえに苦しんで、病気になるほどでした。そして3節には、ヨナダブが出てまいります。ここでは友人として紹介されていますが、ダビデの兄弟シムアの息子ですから、アムノンとはいとこ同士です。そして「ヨナダブは非常に知恵のある男であった」と言われていますが、知恵のあると訳されているヘブル語は、確かに「賢明な」

「熟練した」というような意味を持つ言葉ですが、むしろここではネガティブな意味で「悪賢い」とか「聞こえのいいことを言うのがうまい」というような意味です。2節で妹タマルのゆえ

に苦しんで、病気になるほどでしたから、周りからも体調が悪そうに見えたのでしょう。ヨナダブはアムノンに、「なぜ、朝ごとにやつれていかれるのですか。そのわけを話してください。」と言うと、アムノンは、妹のタマルを愛していることを告げます。するとヨナダブは5節でアムノンが、妹タマルに近づくことのできる策略を授けます。そして、実際にそれを実行に移して、ダビデもタマルがアムノンのもとへ行き、食事を作るように命じます。確かにヨナダブの策はうまくいきました。

私たちは、悩んだり、自分でどうすることもできずに悩む時にいろいろな人にアドバイスを求めることがあります。もちろん、それが悪いとは言いません。しかし、どのアドバイスも必ずしも良いとは限りませんから注意しなければなりません。むしろ、私たちは悩みの中に置かれたなら、主に助けを求めて祈るべきです。主はみことばを通して私たちにアドバイスをくださいますが、それが私たちにとっては適切で、最善のアドバイスなのです。

5月30日（土）サムエル記第二13章8～14節

**「しかし、アムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、力づくで彼女を辱めて、彼女と寝た。」
（14節）**

聖書は、ダビデとバテ・シェバの姦淫の罪に続き、アムノンの強姦事件をも赤裸々に記しています。なぜ聖書にこのようなことが書かれてあるのかと思われそうですが、むしろ聖書は人の罪を明らかにし、人の目に隠された情欲や罪を明らかにしています。

8節でダビデの命を受けたタマルは、アムノンの家に行き、彼のために団子を作ります。鍋を取り、料理をよそいましたが、彼は食べることを拒み、その場にいた者たちを外に出し、二人だけになる状況を作りました。そして食べ物を自分の寝室に持って来させ、彼に食べさせようと近づいたタマルを捕らえ、「妹よ。おいで。私と寝よう。」と言います。しかしタマルは、それを頑なに拒み、「こんな愚かなことをしないでください。」と言います。また13節でも「あなたも、イスラエルで愚か者のようになるのです。」と言います。愚かとは、アムノンが加えようとした性的暴行による姦淫の罪をも指していると思われますし、昨日も記しましたが、アムノンはダビデ家の長子で、ダビデの後の王位を継ぐべき人物でした。その者が性的暴行の罪を犯して律法に反することをするのは、確かに愚かなことだったのです。13節にありますように、もしタマルが姦淫の罪を犯したなら、彼女にとっての汚名となり、アムノンもイスラエルで愚か者となり、互いの将来が台無しになるということです。それで、「今、王に話してください。きっと、王は私があなたに会うのを拒まないでしょう。」と言いますが、レビ記18章6節には「だれも、自分の肉親の者に近づき、相手の裸をあらわにして交わってはならない。」とされているので、ダビデに言っても王によってアムノンとタマルの関係が許されたとは思えません。タマルがこれほどまでに拒んだにもかかわらず、情欲に負けたアムノンは、彼女の言うことを聞こうともせず、力づくで彼女を辱めて、彼女と寝たのです。（14節）

マルティン・ルターは、「頭の上を通り過ぎる鳥の行く手をさえぎることはできないが、頭の上に巣を作るのをやめさせることはできる。」と言いました。欲であったり、さまざまな考えが通り過ぎる鳥のように、頭の中を行きめぐることがあるでしょう。それらを完全に排除したり、コントロールすることはできませんが、欲を自分のうちにとどまらせて、罪へと発展するのを決して許してはなりません。「欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」（ヤコブの手紙1章15節）とあるとおりです。例えば、アムノンはタマルと二人きりの状況を決して作るべきではありませんでした。罪を犯すことは決して仕方がないことではなく、神が憎まれ、忌み嫌われることです。そして、もし自分の罪深さや弱さを自覚しているのであれば、常に主の助けを祈り求めましょう。